
輝く汗

小説家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輝く汗

【Zコード】

Z8382A

【作者名】

小説家

【あらすじ】

父が監督をしている少年野球チームに入った主人公樋口真央普段
の練習では一生懸命練習する。しかし父は試合に出す気はなかつた。
試合があつた日の夜は父と喧嘩。しかし、ある日突然他界してしま
う。コーチが監督代行に。そんなある日の練習中コーチに「キャプ
テンをやってみないか?」と誘われる

輝く汗第一話

樋口真央小学5年生。3歳の時から父が監督をしている少年野球チームの入った真央は小さい頃男子から虐めを受けた事があった。そんな事に一度とならないよう頑固な父は真央を試合には出さず試合の時はいつも雑用。試合のあつた

夜はいつも父と大喧嘩していた。そんなある晩この日も練習中の態度について喧嘩した。しかしその晩父は突然他界した。あまりにも突然の出来事だった。

今日はそんな父に代わり新監督が就任する日だ。

新監督は父が監督の時にコーチを務めていた人だった。練習が始まらしくすると真央が呼ばれた。「何でしようか?」真央が聞くと「お前キャプテンやってみないか?」真央は驚いた。

「やらせてください」こうして真央はキャプテンになつた。真央は練習を始めた。一ヶ月猛練習。一ヶ月後紅白戦にテスト登板した。

真央にとって初めてのマウンド。「真央声出せよ」監督の言葉。ところが洗礼を浴びた。5失点でマウンドを降りた。

真央はベンチに戻り階段に座り泣いていた。

「気にしないで頑張つて」声をかけてくれる男の子がいた。いつもおとなしく

真面目な子だ。名前は藤原純一。真央は一目惚れした。練習が終わり2人は家に帰つた。

こうして土曜日練習試合相手は住吉。父と仲が良かつた監督がいるところだ

この日は36度を超える真夏日だつた。先発は真央だつた。相手の先発も女の子だつた。試合が始まつた。真央は連打を浴びたが見方のファインプレーに助けられた。一方打線は相手の女の子のピッチャーの前に一塁もいけなかつた。

両投手の投げ合い。真央は一イニング投げただけで汗びっしょりだつた。髪から汗がポタポタ落ちていた。6回裏終わって0・0。7回表ツーアウトランナーなしからランナーが出た。先制のチャンスにバッターは真央。「シユツ」

「カキン」「バシツ」打てず。7回裏真央はマウンドを降りライトのポジションについた。暑さのせいかフォアボールを許しヒット打たれた。ノーアウトランナー一、二塁バッターは先発した女の子。「シユツ」「カキン」打球はライトへ。

センターの子も走り出す。真央も走り出す。次の瞬間「シユツ」「お前」「あつ」

「ポトツ」その間にランナー生還。さようなら負けだった。「お前何してんだよ」

真央はボールを捕ろうとしたが足にもたつき転けセンターから走つてきた子を倒してしまった。ボールは一人の背中に落ちた。「ごめん」うつむきながらベンチに戻りミーティングを受けた。

ミーティングを受け帰ろうとしたとき相手チームの女の子がやつてきた。

「あんたはね野球向いてないよ。辞めた方がいいと思うよ。チームのみんなも喜ぶだろうし、あんたみたいなお荷物は試合でも練習でも邪魔なだけ良く続けられるよね。頭おかしいんじゃない」真央はそう言われ涙がこぼれてきた。

帰り道川岸まで来たときだつた。後ろから同じチームの男子たちが周りを囲んだ。「お前迷惑なんだよ。野球なんて辞めちいまえ」リーダー的存在の男子が言つた。「嫌」真央が言つた瞬間一人の男子が真央の背中を押した。真央は

川岸の上から落ちた。雨が降り出してきた。しばらくして男子たちがやつてきた。「お前が辞めるつて言つまでやめないと」少年たちは真央の体を蹴り始めた

そんなとき川岸を純一が歩いていた。道に真央の自転車下を見るとユニフォームを着た男子たちが集まっていた。「何しんの?」純一

が田の当たりに下のは泥だらけで蹴られている真央だった。「そんなしちゃだめだよ」「黙れ バシツ」

男子たちは純一の腹に思いつきりパンチした。純一はしゃがみ込んだ。雨は強くなってきた。真央は疲れぐつたりしていた。純一は真央の体をぎゅっと抱きしめ寝てしまった。「私純のこと好きだよ」

「何言つてるん?」「起きろ」

真央は田をさました。周囲には野球チームの監督と純一などがいた。病室だった。「樋口全て藤原から聞いた。チームにとつてお前は大事な存在だ

もつと練習して頑張ろうな」監督が言った。「私あの子に勝ちたいです。特訓して勝ちたいです。純一とバッテリー組みたいです。」

真央が言つた。

「わかった俺はそろそろ帰るからなあ」監督は帰つた。それから三日後真央と純一は退院した。

退院3日後野球チームの合宿の日をむかえた。

真央は昔からかわいい服が好きだったが男子ばかりの合宿ということもあります

楽な格好で学校にやつてきた。バスで移動席は純一と隣同士だった。途中公園で遊んだりした。宿舎に3:00についた。

5:30分まで自由時間と入浴時間を入れている。

純一はみんなとお風呂に入るのが嫌いだった。

真央も一人で入るのは嫌だった。純一は風邪気味と言つて風呂に入らなかつた。

ほとんどのメンバーが5:00までにお風呂に入った。

5:00時過ぎ2人は風呂場で待ち合わせした。

輝く汗第一話

5：00時過ぎ2人は風呂場で待ち合わせした。2人だけで男子風呂に入った。しばらくして人影が見えた。2人の胸はバクバクしていた。「何してんの?」風呂場に男子が入ってきた。

「風呂」純一が答えた。

扉が閉まつた。風呂から上がり夕食が終わり監督に2人は呼ばれた。
「樋口、藤原こっち来い」

「何ですか?」真央が聞いた。

「お前ら2人だけで風呂入つたな?入室式の時に言つたはずだ。樋口は女子風呂に一人で入るように。約束を破つたんだから明日はそれなりにきつい練習をうけてもらうぞ」監督は怒り口調で言った。夜班長会議で真央が部屋からいなくなつた時だつた。

「藤原、樋口と風呂入つたんだろう?」男子たちに問いつめられ押し入れに閉じこめられたりした

こうして朝が明けた。朝食を終えユニフォームに着替えバスに乗り込んだ。

グラウンドにつき練習が始まった。

しばらくして純一と真央が呼ばれた。

「今から昨日の罰だ。そこに立て」

「いぐぞ。まずは樋口」「カキン」いきなり強烈な打球。真央に捕れるはずもなかつた。「2人で合計250本捕れるまで」「次藤原」

「カキン」純一はボールに飛びついた「バシッ」

交互に強烈な打球が打たれていく。しだいにやり方の分かつた真央はボールに飛びついて行つた。しかし純一はしだいに動きが鈍くなつていて。「きちんと捕らんか。」全身真っ黒のユニフォーム。真央はグラウンドに倒れ込みながらなんとかボールを捕つていた。しか

し元々泣き虫の純一は泣きながらボールを捕ろうとはしなかった。

「純一ちゃんとやつてよ」真央は横に倒れ込みながらとつたボールを純一の背中に投げつけた。始まって2時間やつと罰ゲームは終わった。

足に力が入らず真央は立てなかつた。純一は立ち上がり真央を引つ張つた。

「そんなに元氣あるやつたら真面目にしてよ」真央は純一を叩いた。2人はこの練習後一言も話さなかつた。午後真央は一人筋トレヒトスバッティング、走り込みをしていた。練習が終わり宿舎に戻つた。部屋でも2人は一言も話さなかつた。話したとしても今までみたいに「純ちゃん」や「純一君」ではなく「藤原」と呼び捨てで呼んでいた。

合宿最終日の紅白戦純一も真央もヒット〇だつた。

練習が終わり練習グラウンドから宿舎までのマラソン。樋口はあまりのしんどさに泣きながら走つていた。

「樋口さん大丈夫?」いつも外野を守つている男子に声をかけられた。

「しんどい」真央は答えた。男子は真央と一緒に宿舎まで走つた。純一と上手くいかない真央は彼のことが気になつていた。

夜班長会議も終わり部屋に戻ろうとする真央を男子が引き留めた。

「純一の事どう思つてんの?」男子からのストレートな質問

「好きだけど」真央は答えた。

「仲直りしたら?仲直りしたいつて純一が言つてたよ」男子が言つた。

男子は喧嘩した日の入浴タイムの時に純一と話をしていた。

こうして帰りのバス純一はその男子と隣同士になつた。

「樋口純一の隣座るか?」

窓の外をじつと見つめている真央を誘つた。

樋口は立ち上がり純一の隣に座つた。

バスが出発車内では合宿中の思い出を一人一人マイクでしゃべつて

いた。
純一の番がやつてきた

輝く汗第三話

純一の番がやつてきた「えつと合宿の思い出は樋口と一緒にお風呂に入つて監督にばれて罰ゲームを受けました。その罰ゲームの後樋口と喧嘩してしまい今も仲が悪いままです。仲直りしたいなあと考えています。あのときは眞面目にしなくて樋口「ごめん俺は頼りないけどお前の事が好きだ」寝ていたチームメイトたちはみんな起きていた。マイクは真央に渡された。

「私も合宿では藤原君と喧嘩してあまりいい思い出がありませんあの時は怒つてごめん。私も純ちゃんの事が好きです」真央が言った
「お似合いカップル」チームメイトの男子たちが冷やかし始めた。
そんなうちにバスはいつも練習している小学校についた。

2人はそれぞれの家に帰った。野球チームはちょっと夏休みに入つた。

しかし練習のない日も2人は炎天下の中走り込みや、ノック、打撃練習をした。8／19（日）練習がはじまつた。2人の密かな練習の成果が表れた。

8／20（月）本山との練習試合先発は真央。失点数は減少したもののチームは4-1で負けた。真央たちのチームの一点は途中から出場している純一のスクイズによるものだった。

なかなか勝てない真央は落ち込みながら家に帰つていた。

純一は途中の道まで一緒に帰つた。途中で一人は別れた。うつむきながら歩いていると女子高生と肩がぶつかつた。「すいません」真央は謝つた。

「誰にもの言つてるん? あんたより私たちの方が年上よ。ちょっとこつちきな」女子高生の言葉。真央は無理矢理連れて行かれた。

「お前これでも吸つてみろ」女子高生に勧められた。真央は投げやりで吸つてしまつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8382a/>

輝く汗

2010年10月9日23時05分発行